土木学会東北支部技術研究発表会（令和4年度）

公共交通の利用経験が地域への態度に及ぼす影響に関する研究

秋田大学　　学生会員　○辻　美郷
秋田大学大学院　正 会 員　　日野　智

1.　はじめに

地方部をはじめとする各地域では、マイカー依存、少子高齢化および人口減少により、公共交通の利用者減少が課題である。経営が困難になる一方、自動車の運転を辞めたい高齢者をはじめ、誰もが自由に移動できる公共交通を維持することが求められている。本研究では、公共交通の経営維持に必要な若い世代の利用者確保に役立てるため、小学生から高校生までの通学をはじめとする公共交通の利用経験が、大人になったときの公共交通利用意向等にどのように影響するかを明らかにする。また、直接的な利用者増加だけでなく、地域愛着の醸成など、公共交通を利用した通学がもたらすその他の効果を明らかにし、公共交通利用を促す新たな動機を見出すことを目的とする。

2.　意識調査の概要

本研究では、小学生から高校生までの通学手段、現在の公共交通利用状況および利用意識を調査するため、大学生をはじめとする 20 代前後の若者を対象とした意識調査を行った。全国の若者を対象に、本大学の授業内での調査と Google フォームによる調査を行い、計 210 票を回収した。

3.　通学経験が現在の移動手段に与える影響

現在の公共交通の利用状況は図 1 のようになった。徒歩を除けば自転車利用が最も多く、路線バスとタクシーは利用頻度が少なかった。

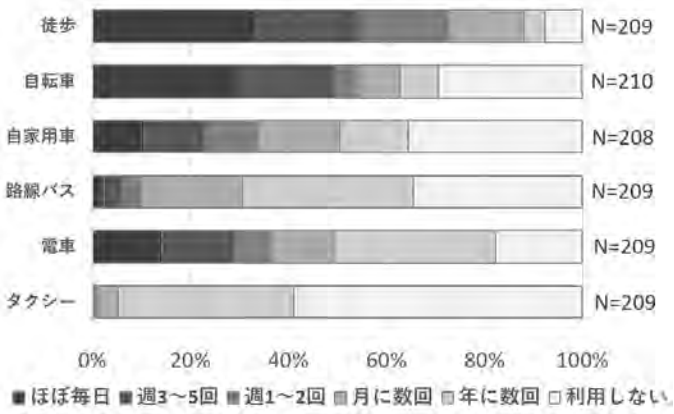

図 1　現在の移動手段

本研究では、通学に利用した移動手段やその時の経験についても調査した。また、通学経験が現在の移動手段に与える影響を把握するために、クロス集計による利用頻度の分析をおこなった。図 2 は、高校生の晴天時の通学手段として自家用車を利用した人と公共交通を利用した人の、現在の公共交通利用頻度を比べたものである。

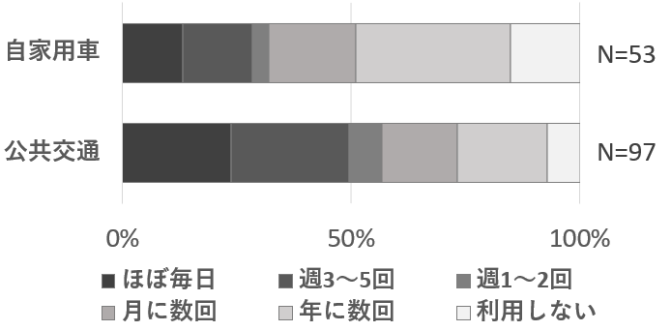

図 2　通学手段と現在の公共交通利用頻度**

**p<0.01

図 2 において、t 検定をおこなったところ、通学で自動車を利用した人と公共交通を利用した人との間で、現在の公共交通利用頻度に有意な差が見られた。

4.　通学手段が地域愛着に与える影響

本研究では、通学での利用経験から、直接的な影響が見込まれる利用頻度だけでなく、出身地の地域愛着に与える影響についても分析をおこなった。地域愛着尺度については、荻原・藤井[1)]が主成分分析により構成した 13 項目からなる 3 つの尺度、地域愛着(選好)、地域愛着(感情)、地域愛着(持続願望)を用いた。各尺度を構成する項目を表 1 に示す。また、尺度を構成する項目の一貫性を示し、尺度の信頼性を示すために信頼性分析をおこなった。各尺度の信頼性係数 α も表 1 に示している。信頼性係数 α はどれも 0.8 を超えており、十分な水準であった。今後の分析では、これらの項目の平均値で各尺度を構成し、用いる。

キーワード：公共交通計画、社会態度、交通意識分析、意識調査分析
連　絡　先：〒010-8502　秋田市手形学園町１－１　TEL(018)889-2359　FAX(018)889-2975

表１　地域愛着尺度の構成項目と信頼性係数α

地域愛着（選好）α＝.86
出身地は住みやすいと思う
出身地にお気に入りの場所がある
出身地を歩くのは気持ち良い
出身地の雰囲気や土地柄が気に入っている
出身地が好きだ
出身地ではリラックスできる
地域愛着（感情）α＝.88
出身地は大切だと思う
出身地に愛着を感じている
出身地に自分の居場所がある気がする
出身地は自分のまちだという感じがする
出身地にずっと住み続けたい
地域愛着（持続願望）α＝.81
出身地にいつまでも変わって欲しくないものがある
出身地になくなってしまうと悲しいものがある

調査では、上記の地域愛着指標に「出身地に貢献したいと思う」「出身地での人間関係を大切にしたい」「出身地の公共交通に愛着を感じる」「出身地のイベントに参加したい」「出身地のまちづくりビジョンに興味がある」等、地域愛着に関連していると考えられる項目も追加している。

通学で利用した移動手段と、地域愛着についての項目とのクロス集計の結果およびｔ検定の結果を図３に示す。集計の結果、「出身地は住みやすいと思う」の項目で、通学で自家用車を利用した人と、公共交通を利用した人とで有意な差が見られ、公共交通利用者の方が、地域愛着が大きいという結果になった。また「出身地の公共交通に愛着を感じる」の項目でも有意な差が見られた。逆に「出身地のイベントに参加したい」では、自家用車利用者が優勢な形で、有意な差が見られた。

また、13 個の項目の中では、ｔ検定で有意な差は認められなかったものの、いくつかの項目で自家用車利用者の方が地域愛着について優勢な結果となったものも見られた。しかし、「出身地にお気に入りの場所がある」「出身地の雰囲気や土地柄が気に入っている」など、地域や都市の全体的な印象を問う質問においては、公共交通利用者の地域愛着の方が優勢になっていることが多く見られた。

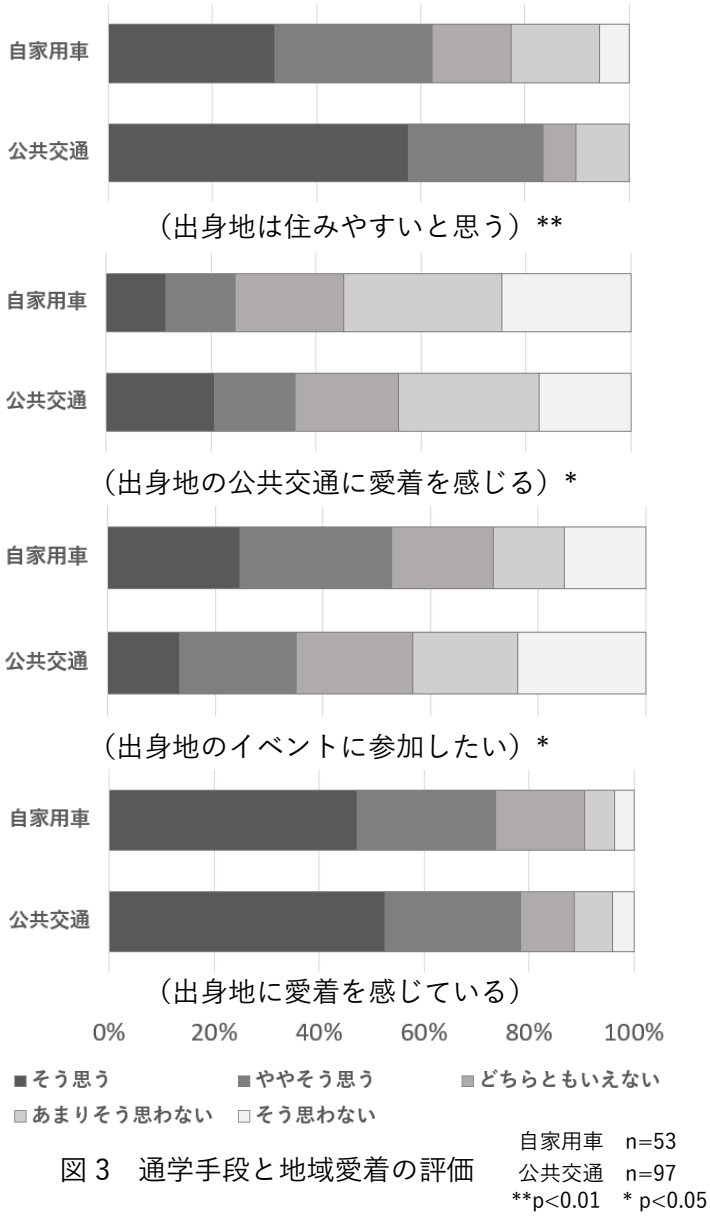

図３　通学手段と地域愛着の評価

5.　おわりに

本研究の結果、通学での交通手段の利用経験は、大人になったときの各交通手段の利用頻度に有意な影響を与えうること、また通学で公共交通を利用することは、その地域の景観や都市全体の雰囲気など総合的な地域の印象に対して、より評価が高くなる傾向が考えられた。通学手段が将来の地域への態度に与える影響を明らかに出来たと同時に、通学手段は子供だけの意思で選択するものではないため、この結果を親世代も認識することで、公共交通利用の促進を今後も進めていく必要がある。

参考文献

1）荻原剛、藤井聡：交通行動が地域愛着に与える影響に関する分析、土木計画学研究・講演集、vol.32、p.285、2005